

翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』四編

光延真哉

本稿は、お岩・小平次の二つの怪談を結び付けて構想された合巻『あまのねよつやでうた雨夜鐘四谷雑談』の四編（柳下亭種員作・一雄斎国輝画、安政二年（一八五五）刊）の翻刻紹介を試みるもので、「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』初編」（『東京女子大学紀要「論集」』第67巻第1号、二〇一六年九月）、「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』二編」（『東京女子大学紀要「論集」』第68巻第1号、二〇一七年九月）、「翻刻・『雨夜鐘四谷雑談』三編」（『東京女子大学紀要「論集」』第68巻第2号、二〇一八年三月）の続稿である。凡例は次の通りである。

【凡例】

一、底本には東京女子大学図書館所蔵の甲本「B913.5/R2(1-8)」（初刷り）を用い、適宜乙本「B913.5/R2/b(1-6)」（後刷り）も参照した。図版は甲本（初刷り）を用いたが、参考のため、地の刷りが異なる絵表紙については乙本（後刷り）の図版も掲載した。

一、本翻刻は、本学現代教養学部人文学科日本文学専攻の平成二十八年度の授業「日本文学演習（古典）A」、および本学大学院人間科学研究科人間文化科学専攻の平成二十九年度の授業「日本古典文学研究IC」における学生の発表を基に、稿者が表記の統一等の修正を加えたものである。学生の担当範囲は次の通りである（五十音順）。

磯田真理子氏	1才
磯山友希氏	4ウ・5才
市川藍香氏	7ウ・8才
宇野鈴香氏	8ウ・9才
鹿子島愛氏	12ウ・13才、 18ウ・19才
笠原ちひろ氏	11ウ・12才、 18ウ・19才
菊池恵氏	7ウ・8才
佐藤亜美氏	5ウ・6才
菅原沙也花氏	14ウ・15才、 19ウ・20才、 20ウ
高橋映夢氏	6ウ・7才
高橋理彩氏	8ウ・9才
塚本典子氏	13ウ・14才、 18ウ・19才
村松周子氏	9ウ・10才、 10ウ
渡邊薫子氏	15ウ・16才、 20ウ
安井昌子氏	17ウ・18才
山根悠可氏	16ウ・17才、 19ウ・20才

右以外の箇所は稿者が翻刻した。

一、句読点を補い、通行の字体を用いた。清濁は原本通りとした。

一、適宜漢字を当て、元の仮名をルビの位置に残した。ただし、原本で元から付されているルビについては（ ）で囲み、これと区別した。

一、明らかな誤字については、ルビの位置に（ママ）と記した。

一、文中で会話文と判断できるところは適宜「」を補った。

一、通読の便のため、適宜改行を施した。

一、読み順を示す飛び印の記号は省略した。

一、丁数は、原本の丁付に従い、〈1オ〉〈1ウ〉の形で該当部の冒頭に示した。

一、角書、割書は「／」で示した。

一、判読不明な箇所は、その字数分を□で表記した。

一、その他の注記は「」で示した。

一、作品中には、今日の人権意識に照らして不適當と思われる表現が見られるが、時代的背景と作品の価値とにかんがみ、そのまま掲載することとした。

【翻刻】

〈上冊見返し〉

あま夜のかね／四つやさふ／たん／し／へむの上

たね／かすさく／くに／てるゑ

〈1才〉

書肆錦昇堂来訪て告、「熟今時の江湖を見るに、畏日の石花菜売は片檐に白玉餅を商ひ、愛日の甜酒売は鏡子の上に蒸箱を安て田舎饅頭を鬻ぐ。両頭三面不脱不遺非乖巧ねば、財はえがたし。己も其等に原抛、於岩稻荷と小鱧小平治怪談、二個を一般に綴合せし著述を乞ふ」と、頗当世人情の核心を監察、附嘱を兼受て毛錐は探とも、深き作意もあらばこそ、安積の沼の蒲黄、花形も四谷の是が四編目。猶、追々に続集して、万的一个も高評得、発客の利潤となる斐あらば、前文にも既まうしたる、甌の下の酪を、於岩稻荷の神酒に備、瑠枝の合擔にすなる清白餅を、小平治が靈供に設て、此稗史の得意饗をしたらんも可なるべし。

嘉永乙卯芳歳 柳下亭種員(印)

〈1ウ・2才〉

鬼平の女房於谷

高田大八郎

伊東快甫

甲斐国笛子峠の禁に住て獵人となり、鬼平と変名する。

でこゝらにうろつかれん。命ありての物種ぞ」ト、思ふものから不実にも、大八に捕らへられし女房お疵をうち捨て、左市を抱き馳せ出づれば、妻は逃げ行く夫を見て、「捕らへられし我が身を見捨て、己ばかりが助かる心か。救ふてくれぬか、いき畜生。この辺りに人はないか、助けてくれよ」ト叫べども、篋の他に誰一人、答へをすべき者もなく、又せんすべはあらざれば、身のみ焦るこなたには、「いつぞや武蔵の浅茅が原に、捕り逃がせしよりなほさらに、無念さ心に余るゆゑ、身を苦しめてこゝかしこ、訪ね求めし甲斐国、笛子峠に再会なすは、汝が運の極め也。此度はいかで逃すべき」ト、言ひも終はらず切りかゝる。

大八かねて喜太夫が、手並みも知れば心に恐れ、捕らへし女が髻を、振り放しつゝはたト蹴る。蹴られてお疵はよろめきながら、焚火の上にごうト転げ、はづみにはたト火をうち消し、もとの暗夜トなるものから、喜太夫はなほ大八が、持つたる刃の光を目当てにうちかくるを、こなたは又身を逃れんと、受け流しくつゝ、隙間を窺ふ。

お疵は、いたく脾腹を蹴られて、しばしは起き得ず、燃えさしの火のうちに蠢きしが、よう／＼に立ち上がれど、顔も手足も焼けたゞれ、殊に目先に打ち合はす、白刃の光におのき恐れ、逃げんとすれど身も適はず、あなたこなたとうろつきつゝ、切り合ふ間に転げかゝり、喜太夫が切り込む刃に、左の肩先乳の下にかけて、袈裟懸けに切り下げられ、余る

つきへ

〈5ウ・6オ〉

つゞき 切つ先大八が、右の二の腕切り込めば、お疵がアツト叫びつゝ、倒るゝひまに大八は、刀引つ提げ逃げ出づ。折柄再び山風激しく、燃えたつ火影に喜太夫が、見れば辺りに切り伏せしは、顔ぎに知らざる女ゆゑ、「こは口惜しし。いづくまでも」ト、おぼつかなくもぬばたまの、闇路をはるかに追ひ行きけり。

高田大八は、危うき場をよう／＼逃れ、道のほど一里ばかり逃げのびて、初めてほと息をつくに、心の張りか今までは、さのみに覚へざりし、手傷の俄に痛み出で、耐え難きほどなれば、手拭ひ引裂き傷口を、結びなどしてをちこちを、見るに谷間ト思しきはるかの下々に、火の光ちら／＼ト見えたり。「ともかくも、かしこへ行き宿りを求め、その上にて手傷の療治もせんもの」ト、心に頷き暗き道を、かるうじて辿り着き見れば、いぶせき草の屋にて、内には糸どる車の音の、門に洩れて聞こえたり。

大八は軒端に立ち寄り、「行き暮らしたる旅の者、道に迷ふて難儀致す。一夜の宿りを貸し給へ」ト訪へば、家の内には糸車の手を留め、立ちも上がらず女子の声して、「この家は宿屋にあらず。殊に男の留守なれば、泊むることは叶はじ」ト、言ひ切りしまゝ再びまた、音響かする糸車。大八は繰り返して、「そは理にてござれども、不知案内のその上に、いさゝか怪我をも致せしゆゑ、歩むことの難儀なり。ひらに許して」**一の巻へ** **一の巻より** 今宵ばかりを、明かさせ給へ」ト幾度か、言へど口説けどつれなくも、内にはさらに返事もなく、背戸の榎の木に吹き当つる、木枯らしのみぞ答へして、木の葉は雨ト降りかゝり、寒さのいとゞ身に染むれば、もとより短気の大八が、腹に据ゑかね立て切りし、**つぎへ**

へ6ウ・7オ

つぎ 柴の戸引き開け内に入り、見れば四十路に近からんと、思ふほどの女房が、押して入りしにうち腹立ち、物言ひ出でんとする様に、こなたは「習して宿を借らん」ト、片膝上げて竹縁に、腰うち掛けつ袖引きまくり、傷を彼処へ差し向けて、「旅は道連れ世は情けト、諺にも言ふものを、己は既に一人旅。殊に今方峠にて、大勢の盗人に出会い、皆殺しにはしたれども、我さへ手傷を受けたれば、療治するため宿を頼む。慈悲を知るなら快く、得心せ

よ一ト脅し半分、強面に言ひかゝれど、彼方はさらに合点せず、「慈悲であらうが情けであらうが、この物騒な霜枯時、殊に今宵はこちらの人も、猫に出られて留守なれば、泊むることはなりませぬ。出て行かしゃれ」ト目に角立て、声もつごとに言ひ放せど、大八いつかな動かばこそ、「そんなら主は家業の留守か。さらば帰りを待ち受けて、相對で頼むべし。どれそれままでにゆつくりト、一ツ服しよう」ト言ひながら、取り出す吠の煙草入れ、煙管に詰むる粉煙草に、腹這ひながら櫛の火を、掬ふてそのまゝ、燻らせつゝ、出で行く気色のさらになければ、女房も持て余し、呆れ果て、顔うち見やりぬ。

折柄この家の主ト見え、芋屑頭巾に袴の脚絆し、どんざ布子の袖なし羽織、山刀を腰に手挟み、撃ち留めたる兎一ツ匹、括りつけたる鉄砲を、振り担げてずつト入り、暗き方に寝腹這ひし、大八を尻目にかけて草鞋とくく上にあがれば、待ちかねし女房は、今大八が家に入り、無理に宿りを乞はんとて、断り言へども出て行かぬ、様子を告ぐれば主は頷き、行灯彼方へ差し向けて、「己は何処の何者で、所縁もない我が家へ、男の留守に入り込んで、断り言ふても動かぬは、女一人を幸ひに、折りも良くは物の一ツも、攫つて走る心であらう。主が戻つてならじと言ふなり。サア、きりくゝト出て失せよ。もし

つぎへ

へ7ウ・8オ

つぎ 少しでも長居せば、引つゝ、ツツて目代殿へ、突き出さうか」ト脅しかくれど、こなたはさらにびくともせず、「宿が貸せずは貸せぬまで。盗人とは誰を言ふ。差した刀が目に見へぬか。武士に言ひかけひろいだうは、モウこの家は一ツ寸も、動きはせじ」トこち出せし、言葉を質の高強請り、「これ幸ひの一仕事」ト、心のうちに喜びながら、起き返る途端に顔見合はせ、「思ひがけない伊東快甫」ト、言はれて主もうち驚き、「こなたは高田大八殿」

ト、言ひかゝるを目交ぜで押し止め、「オットその名は、滅多に言ふまい。そんなら、この亭主はお主か。それとは知らずとやかくと、宿の無心の言ひつものり、言葉が過ぎて御内儀に、今さら何とも気の毒だ」ト、言ふに快雨もうち笑ひ、「こなたを俺が知る人と、知らねば定めし女房も、言ひ過ぎしたろう。ソリヤ、互ひそんなことは取つて捨て、合点の行かぬはこなたの身のうへ」ト、問はんとするを大八が、咳にうち紛らし、かなたを向きし女房を、顎で教へて知られぬようにト、示すをそれト飲み込んで「互ひに命があればこそ、巡り会ふ

た
つぎへ

へ8ウ・9オ

つぎき 喜酒。お谷よ、ちよつと一ト走り、酒屋を起こして取つて来よ。どれ、一ト焼べ」ト言ひながら、囲炉裏の櫓火掻き起こす、燃え滅らしたる竹火箸、形も確かに見えぬまで、ふすぶる薬缶の掛かりたる、自在の竹を繰り下ろし、下に落葉を燃し尽くれば、女房は二人が素振り言葉の端々、何となく合点の行かぬ様子にて、納戸の徳利引き提げつ、背戸の方より出で行けば、大八は後を見送り、快雨に向かひ声をひそめて、「思ひがけないこの山家に、おぬしが住んであるようとは、夢にも心がつかなんだ。見れば今の世渡りは狩人そうなが、シテ、いつからこの甲斐（か／ひ）へは住まるする」ト、問はれてこなたも辺り見回し、「されば話すも長いこと。五年、後に大磯で、こなたが捕らへられたといふを、馬入（ば／にふ）からの帰り道、南郷（なん／がう）の並木の陰で、雲介（くも）どもが寄り合ふて、話すのは聞きながら、助けようにも救はんにも、この身一人ですらもなく、まづ一ツ旦は逃に逃げ延びた上で、しようのありもしようと、それからすぐさま山越しに、この甲斐へ逃げて来て

つぎへ

つゞき ほど経つて様子を聞けば、管領屋敷の獄屋を破り、こなたは紛失したとの噂。真か嘘かに知れねど、少しは心も落ち着いて、それからこゝに足を止め、今では鬼平と名も呼び変へ、女房持つての山稼ぎ。そしてこなたは、かしこを立ち退き、今まどこに埋んでゐた」ト、問ひ返すさへひそく声。

大八も頷いて、「いかにも俺が、扇谷の獄屋にゐたのも半年余り。段々どの様子を聞けば、悪事を訴へた奴は、播磨この方家で養ひ、共に騙りの相摺りした疔平と、いま一人は、下女のお疵が馴れ合つてした仕事と、聞いた時のその悔しさ。どうがなして獄屋を抜け出で、彼奴等二人に意趣返しと、思ひ込んで暮らす内、折良くある夜の大嵐。物の響きも知れぬを幸ひ。思ひのまゝに獄屋を破り」ト、言ふに鬼平も膝を進めて、「そんなら、まんまと逃げ延びたか」。「聞きやれ。その夜の間の良さは、籠を破つた羽抜け鳥、翼が生へて身軽になるとも、懐が重くなければ高飛びもなりかぬるト、心がつけば幸ひに、抜け出た獄屋の堀続きが、日頃勝手も覚へた金蔵、難なくかしこへ忍び入り、思ひのまゝに盗み出し、越す堀外に見咎めて、支へだてする時回り、棒振り回すをそのまゝに、どんぶり蹴込んだ溝の中、わつと立つ蚊(か)を撃ち殺す、鉄砲雨の皐月闇。跡くらまして難なく逃げ延び、二人リが在処を問ひたゞせば、どれ、あひ女夫で武蔵の傍ら、浜(いし／ぼま)辺りにあるといふ、噂も確か本牧(ほん／もく)から、神奈川船に便船し、追風に乗り込む隅田川、深い恨みを晴らそうと、浅草辺りへ上がつた頃は、時刻も丁度宵の間に、住処を突き止め切り込めば、彼奴等が運のまだ強さ、家の内には影もなく、逃げてほどなき様子故、すぐに後をト気も急かれ、出る足元に蹴つけたは、蚊遣り火鉢に破れ団扇。風を

つきへ

〈10ウ〉

つゞき ぐくつて煙となる、二人を追ひ行く繩手道、思はず出会ふた香西喜太夫、騙りの恨みを言ひ立て、切りに、盗んだ金も使ひ捨て、それから後は切り取り強盗、悪事のしまかせ。こゝかしこへ二人を探す俺が身も、また喜太夫が尋ねんかと、出会はぬよう心掛け、五年この方逃げ回る、仇た恨みの三つ巴、巡り巡つて今夜思はず、三の巻へつゞく

種員作 国輝画

〈下冊見返し〉

雨夜鐘／四谷雑談／四編／下の巻

柳下亭種員作／一雄斎国輝画

笑寿／家版

〈11オ〉

二の巻よりつゞき 二の巻で瘧病と、お疵めが野宿する、ところへ丁度行き合はせ、存分恨みを晴らそうと、しかゝる最中に寸善尺魔、思ひかけない辻堂から、喜太夫が出しやばつて、逃ぐると逃がさぬ手話めの難儀、挑む最中に焚火は消え、闇をあてなる互ひの意趣討、どさくさ紛れに瘧病は、確かその場を走つた様子。俺と思つて喜太夫が、お疵めを切り倒す、切つ先余つてこれ見やれト、右の腕を引まくり、「手傷は少し受けたれども、俺の運もま

だ、尽きぬか、二度まで危ふい場は逃れ、駆け込んだ家の主か、おぬしであつたも思はぬ仕合せ。しかしくれぐ、残り多い。訪ねてよう、出會つた、瘧平を討ち洩らしたと、お疵めがくたばつたか、それほどの深手でなく逃げ延び

つぎへ

へ11ウ・12オ

つぎ、たか、その様子を見届けぬが残念」ト、一部始終を語るうち、喜平は黙して手を拱ぎ、やゝ思案なす体なりしが、心の内に頷きつゝ、「その様子では喜大夫は、こなたの跡を追ひかけて、確かに遠く走つたろうが、さしあつて心懸かりは、お疵めが死にもやらす、苦しんでゐて夜明けて後、所の者の目にかゝり、詳しいことを告げたなら、それからそれと近くに住む、俺が錆まで出るのも大事。またその上に瘧平めも、一旦その場を逃げ延びても、女房の様子を見ようため、立ち戻つて来るかもしれないねば、これさへなほさら劍呑な、思ひ回せばこのまゝに、うかくしてはゐられぬどころ。俺はすぐさま峠へ行き、お疵めがくたばりきらずは、ばらした上でその死骸を、谷へ蹴込んで人の目に、かゝらぬようにしてしまひ、また瘧平がうろつくなら、どつさり言はせて訴人をされし、意趣を返したその上で、後の難儀も残さぬ工夫。少しも早くかこへ行く。待つてゐやれ」ト囁けば、大八もうち喜び、「いかさまこれは、よい気のつきご。そんならおぬしの帰るまで」「待つ間に女房も戻るであらう。酒でも呑んで、ゆるりトしやれ」ト、出でんとせしが立ち戻り、「必ず俺が帰るまで、この家を出ぬように」。「ハテ、知れた事。難儀な体、他人の家ト見た時さへ、頼む心で頼つた家。まして兄弟同然の、おぬしの家では気も落ち着き」。「ゐる料簡ならそれでよし。どれ一ト仕事、して来よう」ト、胸にいちもつ大八が、心のうちを引鉄の、鉄砲肩にうち担げ、そのまゝ表へ出て行きけり。

鬼平が妻のお谷といふは、武蔵国秩父に生まれ、歳十四、五の時なりけん、よからぬ者と密通なし、諸共に故郷を奔り、三年ばかり連れ添ひしが、もとより多情「たじ／よう」の性なれば、また異人と不義ありしを、夫のこれを見咎めて、傀儡子の身に売り渡され、甲斐相模の駅路に、行き来の

つぎへ

〈12ウ・13オ〉

つぎ 旅人に情けを売り、二十年ばかり世を過ぎしが、近頃ようやく身まゝになれども、誘ふ者もあらざれば、こゝかしこさまよひしを、誰仲立をするにもあらで、鬼平が妻となりたるにて、もとより常の女子に変わりて、肝太き生まれなるが、かの浪人と夫の素振り、怪しとは思ひながら、はるか彼方の村里まで、酒買ひに至りしが、家に戻る傍らに、夫鬼平が佇みゐて、小手招きしてさゝやくよう、「最初の浪人めは、大方ならぬ悪事を働き、管領屋敷を駆け落ちした、高田大八といふ奴にて、今鎌倉から厳しい詮議。たとへ同類仲間でも、彼奴を訴人したならば、科は許して褒美が出るとは、かねての触れに聞いてゐる。今宵来たこそ幸なれ。代官役所へそれと告げ、手引きして召し捕らせ、褒美の金にありつくべし。そなたはこれから家に帰り、酒を強いつけ賺しておけかし。ほどなく捕り手を連れ行かん」ト、夫が告ぐればお谷も喜び、「褒美の金になると聞いては、他人の家にあればとて、訴人したく思ふもの。まして我が家へ来た奴を、そのまゝ往なしてよいものか。少しも早う代官所へ、告げに行かしやれ。その間にもどもかくもして酔ひ臥させ、捕り手の来るを待つほどに、必ず手筈の違ぬよう」トしめし合せり。引き別れ、我が家に戻る女房の、跡を見送つて独り言、「俺がために大八は、現在の従兄弟ながら、悪事といふ悪事を働き、危うい所も運強く、これまで不思議に逃れてゐれども、この山家へさへ行き届いた、厳しい詮議の様子では、所詮長くは保つまい。今にも彼奴が召し捕られたその時に、この身のことまで白状をされたなら、科は逃れぬ騙りの相摺、彼奴が

命と諸共に、細りかゝつた俺が首、丈夫にするといふ。

つきへ

〈13ウ・14オ〉

つゞき 工夫は、訴人して同類の、肩を抜けたその上に、褒美の金にもありついて、回らぬ世帯をゆるやかに、日陰の身さへうち晴れて、世の中を広々と、暮らすといふのが上分別。たとへ縁者が一ツ家でも、背に腹は替へられぬ」ト、人を奈落に沈めても、己は浮かむ非道の巧み。「ア、我ながら、よい思案も出るもの」ト、我が身勝手手の誇り顔、につこり笑みつゝうち仰げば、見るだに凄き冬の夜の、空には星のきらめきつ、笹子風の吹き荒れて、木の葉は雨ト散りかゝり、枯れ枝に叫ぶ梟の、声はかしこに訝なし、遠寺「ゑん／＼」の鐘のこう／＼ト、響くを聞きて耳傾け、「今鳴る鐘は確かに夜中、目代屋敷へ一ト走り」ト、道敷き埋む落葉を踏み立て、かしこを指して馳せ行きけり。

鬼平はどこころの目代なる、石和兵エ「いさは／＼ひようゑ」の門前に馳せ着き、「急々の訴へありて、笹子の麓に住ゐる、狩人鬼平と申すもの、夜中ながら参りし也。委細のことは殿様に、お目通りの上申上ゲン」ト、ことありげに告げゝれば、かくト奥へ取り次ぐに、深更ながら石和平エは、子細あらんと玄関に立ち出で、鬼平を呼び出し様子を問ふに、まづ己が旧悪を、あからさまに告げし後、今宵高田大八が、図らず家に来たりしこと、賺して留めおきしまで、落ちもなく聞こえ上げ、「組子の衆を給はらば、御手引きしてかの者を、召し捕らせ申すべし。さる上は同類の科をば許し、かねてよりお触れのごとく、御褒美を給はれ

つきへ

〈14ウ・15オ〉

つゞき かし」ト告ぐるにぞ、兵エは聞きて深く喜び、「その高田大八といへるは、扇谷の牢内を、紛失なしたる重

罪人にて、管領家の怒り強く、配符を以て五年このかた、諸国を探索する者に、今我が手より召し捕りて、鎌倉へ参らせなば、大方ならぬ手柄なるに、汝よくこそ訴人しつれ。すぐさま捕り手を遣はせば、彼らにとくと示し合はせ、捕り逃がさぬよう計らふべし」とて、捕り手の頭人何某に、その由を下知すれば心得て、組子を従へ、鬼平を案内に先立て、その住家へぞ急ぎける。

お谷は夫に引別れ、何気なく家に戻り、持ち帰りし酒温めて、大八が前に持ち行き、「今酒屋より戻る道 鬼平殿に行き会ひしに、何やら急のことありて、峠まで行くほどに、客人をよく饗せよト、我が身にくれぐれ言はれたり。何はなしとも、酒一つすぐし給ひて、夫の戻るをゆるやかに待ち給へ。ほどなく帰り給はん」と、真しやかに言ひ賺し、かねての手だれ艶めきし、言葉を以て誑しかけ、強いつけく、勧むるに、大八は五年このかた、水にも草にも心を置き、一度の食事さへ、おちくとはせざりしに、今宵は思はず従兄弟同士の、快甫が家に宿るといひ、殊には悪事の同類なれば、今は我から気も緩み、主夫婦が巧みある、饗しぶりとはゆめ知らず、この頃絶えて匂ひも嗅がぬ、好きな酒をは強いつけられ、引き受けく、呑むほどに、大八は立ち居さへ、ならぬほどにいたく酔ひ、「主の帰らば起こしてよ」ト、言ふ舌も早回しかね、そのまゝそこにうち臥して、前後も知らぬ高髻、正体もなきほどなれば、しすましたりトお谷は喜び、「疾くこの暇に鬼平殿の、捕り手を連れて戻れよかし」ト、心を焦り待つ折柄、夫は背戸の方より入り、裏の窓より差し覗き、大八が臥せしを見て、「お谷く」ト小声に呼べば、こなたは心得差し足して、裏口に立ち出で、「こちの人待ちかねた。こなたが最前言ふた通り、大八とやらは酒強いつけ、盛り潰して死人のような。捕り手の衆も一緒に」と囁けば、鬼平も喜び、「ソリヤでかした、よくやつた。組子の衆も連れて来たれば、踏み込ませて捕らへません。そなたは再び大八の、そばに行きて二腰を巻き上げて、怪我せぬよう

〈15ウ・16オ〉

つぎ 背戸の方へ隠れてゐよ」ト、示し合はせて己はまた、敷を潜りて表に出で、合図を待ちある捕り手に、「彼奴めはいたく酔ひ、よく臥してをります。殊に帯した二腰は、妻に言ひつけ奪はせませすれば、お氣遣ひなく踏み込んで、十分に召し捕り給へ。とは言ひながら大八めは、なか／＼腕に覚へのある奴。もしも目覚めてあなた方の手に余る働きを、致しますすまいものでもなければ、己は背戸の敷に隠れ、罾を仕掛けて生け捕る手段。もし逃ぐるとも表は固め、彼奴めが裏に出づるよう、計らひ給へ」と説き諭せば、面々それと心得て、四の巻へつぎ 三の巻よりつぎ 家の内へ忍び入り、「様子いかに」ト窺ふに、運の極めト大八は、筵屏風の陰に寄り、前後も知らぬ高軒、組子は見留めて「折り良し」ト、後や枕に立ち回り、「大八捕つた」ト言ひ様に、手足をしつかト押し臥せれば、驚きながら心得たりト、力を極め跳ね返し、手当るまゝに弓手馬手、弾みを打つて撥ね除けつゝ、刀「かた／＼な」を取らんとト身構へれば、そばに置きたる両刀「りよう／たう」なし。こゝに初めて、夫婦の者の捕り手を引き入れ、絡めさせん手だてと強いたる最前の酒ト、心はつきながら、「また今さらにせん術も、たゆたふ暇もあらばこそ、気早き組子の飛びかゝるを、身を沈めて心の当て、「こなたに組まん」ト寄り

つぎへ

〈16ウ・17オ〉

つぎ 来るを、左足を上げてはたと蹴る。さしも鋭き働きに、捕り手も些か怯むを窺ひ、筵屏風を取るより早く、自在の竹をうち折れば、鑓子は檜火の上に落ち、四方へハット立つ。灰に家内は霧の湧きたるごとく、ものゝ隘路も分かたねば、捕り手は慌て惑ふ間に、大八表へ出でんとするに、鎖しも厳しく固めたれば、引き返してかねて見おきし、背戸の方へ馳せ出づる。

捕り逃しては叶はじと、面々続いて追ひ出づれば、裏手の方の竹藪を、潜りてこゝを逃れんと、折懸垣のまばらなる、ところを左右へ押し分くる。鬼平はこゝに最前より、身を潜めて忍びるしが、罨のうちへ大八が、足を入るゝを見るよりも、しすましたりと繩の端を、力任せに引き立つれば、大八どうと臥しまろび、起きんとする間に組子の面々、馳せ着きて折り重なり、遂に厳しく縛むれば、捕り手の頭人懐中より、絵姿を取り出だし、大八らに引合せ、鬼平夫婦を招きて言ふやう、「神妙なる訴人といひ、殊に機転の働きて、管領家より詮議厳しき、高田大八を召し捕ること、みなその方が手柄なれば、右の次第を詳しく申し、褒美をば給はるよう、取り計らふて得さすべし」ト、言ふを聞き、夫婦の者は、「よろしきやうにお取りなしを、ひとへに願ひ上げます」ト、土に頭をすりつけて、追従たらしく喜ばば、縛められし大八は、夫婦の者を

つぎへ

へ17ウ・18オ

つぎにらみつけ、「身の科重なるこの大八。どうで逃れぬ天の網。刀の錆になることは、もとより覚悟の上ながら、われと俺とは従兄弟同士。殊に悪事も馴れあふて、働いた互ひの身の上。心の不覚と言ひながら、よもやと思ひ気を許し、己ら夫婦に謀られ、やみく縄目の恥に遭ふは、返すぐも残念な。所詮今度は逃れぬ命。身は刑罪にならざるも、恨みの念は世に止まり、わいら夫婦をそのまゝに、安穩でおくべきか」ト、怒りもだへて罵れば、鬼平はさすが理に責められ、差し俯いて返答せぬを、お谷はそばにもどかしがり、夫を引除け前に進みて、「大八殿、さりととは未練な。悪事を働くようにもない、女に劣つた愚痴な言葉。鬼平殿とこなたとは、従兄弟同士でも兄弟でも、わしはもとより赤の他人。最前家に来た時に、夫と二人が言葉の綾。合点が行かぬと思ふた故、酒買ひに行くふりして、門で様子を立ち聞きすれば、いつぞやからお触れがあつた、詮議の厳しいこなたの身の上。匿ふた者までが、咎

めに遭ふとはかねての噂。さてはと思ひ鬼平殿の、出るのを待つて勧め立て、目代所へ遣つた後、酒強いつけて酔ひ臥させ、刀を取り上げ捕り手の衆を、引入れたもわしが技。人の身よりも我が身のうへ。知らぬこなたの巻き添へに、大事の夫を殺すが嫌さ。告げさせたのが何とした。訴人されたを恨まうより、今まで悪事を働いた、我が身を恨んでゐたがよい。それともたつて口惜しく、死んでわしに崇るうと、思ふ気ならば御勝手次第。とは言へ生きてゐるうちさへ、女子のわしにのめくと、騙さるゝ愚かさでは、死霊の手際も思ひやらるゝ。無駄なことを言ふ口で、念仏の一ツ遍も、唱へた方がましである」ト、まくしかけたる悪口雑言。さすが我慢の大八も、お谷がために言ひ伏せられ、言葉出でねば気は急ぎたち、「そのおとぼねをけ裂いてくれん」ト、走りかゝるを縄取りの、しつかト留め動かせず。「とく引立てよ」の下知につれ、追ひ立てく、目代の、役所を指して引行きけり。

石和兵エはその曉、囚人籠に大八をうち乗せ、警固の武士嚴重に、鎌倉へ指し送り、狩人鬼平が訴人のこと、かつ彼が以前の身まで、落ちもなく達しけるに、管領家にも憎しみ深き、高田大八の手に入りしを、大方ならず喜びて、兵エが功をあつく賞し、又 **つぎへ**

○此画は五年以前、妻之助が生れし頃の図と見給ふべし。

〈18ウ・19オ〉

つぎ 鬼平は、同類の科を許し給へる上、訴人したる褒美とて、数多の黄金を与へ給ひぬ。

かくて石和の郎党らは、甲斐国へたち帰り、管領家より示されしことを主人に聞こえつゝ、件の金子を差し出だすに、兵エはさつそく鬼平を呼び出し、鎌倉の命を言ひ聞け、かの金子を与ふれば、喜びて受け頂き、そのまゝ家を持ち帰り、お谷にもかくト告げ、「今は世間も広くなり、思ひがけなく金さへ得たれば、この山中にあらんより、鎌倉

へ行き、ともかくもせんもの」ト相談極め、いさゝかありつる家財は残らず売り払ひ、甲斐国を立ち出で、鎌倉へ赴きけり。鬼平夫婦が身の上は、後の巻に再び説くべし。

○瘧平は、笹子峠に思ひがけなく大八に出会ひ、既に危ふきところをば、左市を抱きようく逃れ、明けの朝様子を聞くに、女房はかしこに殺され、大八もその夜のうちに麓の村で召し捕られ、鎌倉へ送られしと聞き、ようく心落ち着き、もとより不実の性なれば、妻のお疵が死にたるは、さのみ心に嘆かねども、乳飲み子に当惑なし、抱き抱へてこゝかしこ、さまよひ歩き情けある、人を頼みて貰ひ乳なし、武蔵国八王子「はち／わうじ」に近き辺りの木賃宿に、いかゞしてか足を留め、昼は左市を抱きつゝ、往來に出で心ある、旅人ト見ればうち嘆き、軽き荷物を持たせて貰ひ、露の命を繋ぎてあるうち、ある日一人旅の男を見かけ、荷物を乞ひて持ちし途中に、「幼子を抱きながら、かゝることをするはいかに」ト、問ひ掛けられて瘧平は、空涙を流しつゝ、「上方より親子三人、関東へ下る道にて、妻は俄に病起り、病中に貯はへし、金子は残らず使ひ捨て、療治も叶はず遂に身罷り、故郷へ歸らんにも道方なくて、このごとく乳飲み子を抱き抱へ、人の情けに世を渡る」ト、嘘八百を言ひ並べ、哀れげに聞かせるは、賃銭のほかに又、銭を貰はん下タ心ト、かの旅人はつゆ知らねば、「そは不幸せの限り也。我が身は下総結城の者。用事ありて甲斐に赴き、今歸る道なるが、去年の冬、妻の産みたる小児は、襦袢のうちに果て、今も乳は猶出れば、その幼子を貰ひ受け、我が子となして養ふべし。親知らずにくるゝことの得心ならば、いさゝかの金子は与へ申さん」

ト、つぎへ

○高田大八、由比ヶ浜に獄門にかゝる所

つゞき 言はれてもとより瘧平は、願ふてもなき幸ひなれば、早速に得心するに、途中にてもいかゞなりト、宿外の出茶屋に入り、金子を出し与ふれば、瘧平これを受け収め、懐の左市を渡すに、旅人は抱き取り、心ありてか我が名は明かさず、引別れて立ち去れば、瘧平は僅かこゝにありしが、悪事を働かす住まらかね、行く方も知れず逃げ去りけり。○大磯の歌女琴治は、大八が捕らへられし後に、追ひく様子を聞くに、姉のお佐雅と近江にて密通なし、泡之進を殺害せしも、又母親お爪をば、腰越の屋敷において殺せしも、みなその人の業なりと、聞くに初めて過ぎし夜の、夢のこどさへ思ひ合はされ、悪因縁にて敵同士、契りを交はしその胤を、身に宿せしもあさましく、死なんと覚悟極めしを、かの花菱屋の主夫婦は、情けある者なれば、様々に異見なし、留められて憂きなかに、一日くど過ぐるうち、月満ちて男子を産むに、なほざりならず介抱して、産まれし小児は妻之助と、名づけて家に育て、くれ、ば、琴治も今さら慈悲深き、主人夫婦の心にほだされ、かつは我が子の愛にひかれて、死ぬべきことは思ひ留まり、産屋の内を出づる頃、大八は鎌倉の獄屋を破り逃げ失せしト、聞きてさすがは行く末の、案じらるれど詮方なく、せめては主人へ恩奉じト、肥立つ日さへも待ちかねて、再び座敷へ出づるにも、心を入れて勤むるうち、この年の暮れに至りて、まつたく年の明きければ、琴治が日頃の実義を知る者、こゝかしこ縁づけんト、世話するも多けれども、深く否みて従はず。主の情けに大磯の、裏町に借家なし、名さへお琴と呼び変へて、妻之助とたゞ二人り、このところに引移り、年馴れし業故辺りの子どもに三味線を、教ゆることを世を渡る方便トなし、春ト過ぎ行き秋ト暮れ、五年は早忽ちに、今年も暮るゝにや、近く、いとゞ短き冬の日の、七つも少し下がる頃、常に親しくこの辺りへ、青物を売り来る男が、お琴が家の縁先に、腰打ち掛けて煙草の火を、乞ひながら浮世話に、「今朝鎌倉の由比ヶ浜を、通りかゝるとたつた今、切り懸けたばかりの獄門。確か五年先とやら、扇谷の藩中者

つぎへ

つゞき 高田大八とかいふ奴が、様々の悪事が顕はれ、この大磯で召し捕られ、牢舎させておくうちに、ある晩獄屋を破つて逃げ出し、こゝかしこに隠れてゐたを、今度甲斐の笹子峠の麓とやらで、再び捕らはれ、重なる科とて獄門に、懸けられたとかいふ話。わしは無筆で分からねど、そばにゐた御出家が、捨札を読んでの講釈聞いてから、よく見れば、なるほど物は争はれぬ。男はよけれど悪巧みを、いかにもしそうなその面付、お仕置きになる当人は、心柄故是非なければ、もし妻や子が世の中に、あつてそれとも知るならば、嘆きの程はどのように、あらうと思へば痛ましい」ト、現在そばに妻や子の、あるとも知らずよそごとにて、話すうち早吹き殺も、灰「じよ／＼」となりゆく空煙管、腰に提げたる筒に押し入レ、「明日又来ん」と出で行けば、お琴は聞くに胸潰れ、急ぎ来わ涙をおし静め、つく／＼と思ふよう、「大八殿は、我が身のためには母様の敵ながら、妻之助には実の親。その死に恥を何として、よそ目に眺めてゐらるべき。今宵かしこへ忍び行き、密かに首を盗み取り、懇ろに葬りて、業因「ごう／＼」深き身はもとより、我が子にも出家させ、非命「ひ／＼めい」に死せし人々の、後の世永く申ん」ト、思案のうちに日は暮れつ。取り出だしたる行灯の、内に見えたる灯心も、たゞ一筋に思ひつめ、我が子をすかし寝させおき、身はかひ／＼しく袂端折り、密かに外へ立ち出れば、昼の北風「なら／＼」の吹き交はし、風は南の雨催ひ、星さへ見えぬ真の闇。「忍び歩くには折よし」ト、浦手の方の真砂路は、こゝ小余綾の磯伝ひ、うら寂しけな松風ト、よその哀れを知ればにや、千鳥も己が音に鳴きつ、砥上「ど／＼がみ」、腰越、竜ノ口「たつの／＼くち」、ゆすあひ川も疾く過ぎて、由比が浜へぞ急ぎける。

此文五編へつゞく

【図版】

上冊・下冊表紙



上冊見返し・1才



1ウ・2才





2
ウ・3
才



3
ウ・4
才



4
ウ・5
才



5
ウ・6
才



6
ウ・7
才



7
ウ・8
才



8ウ・9オ



9ウ・10オ



10ウ・上冊後ろ見返し



下冊見返し・11才



11ウ・12才



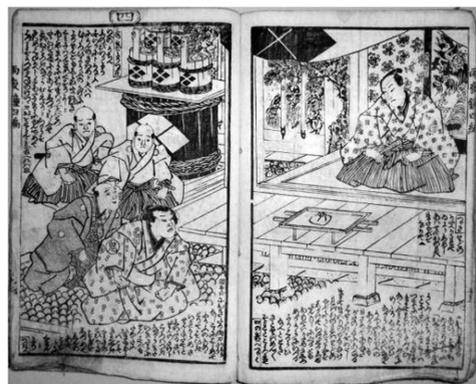
12ウ・13才



13
ウ・14
オ



14
ウ・15
オ



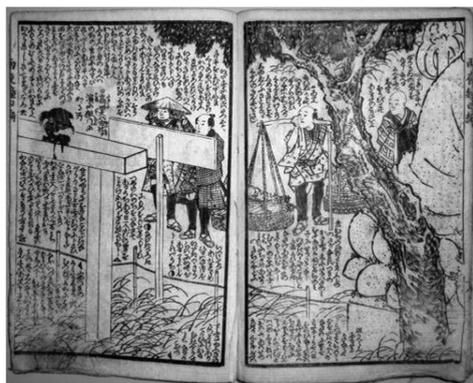
15
ウ・16
オ



16
ウ・17
オ



17
ウ・18
オ



18
ウ・19
オ



19ウ・20オ



20ウ・下冊後ろ見返し



上冊・下冊 表紙 (後刷り)

下冊後ろ見返し（後刷り）



キーワード

合巻、四谷怪談、お岩、小平次、柳下亭種員、河竹黙阿弥、仮名垣
魯文